

本日の学び:「恵みはわたしに十分」 テキスト:第二コリント12章1-10節

【理解の手がかりとして】

概論にて伝えていたように、この10章1節～13章10節の部分は、9章以前のものとは時間的連続にない。前後の文脈が中断されており、調子も激情的なので、主部よりも早い時点において書かれた「手厳しい手紙」（涙の手紙）と言われている。

12章1節後半から4節まで、パウロは彼自身の特別な「忘我体験」について語る。彼がここで「わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っています」（12:2）と第三者的に呼んでいるのは、ほかでもなく「パウロ自身」である。その体験報告を為す理由、それはコリントの敵対者たちが、使徒たる者の資質として超自然的な忘我体験・異言体験の必然を主張したり、誇ったりしていたからだと思われる。

それに対して、パウロは自身もそのような経験（あのダマスコの途上にて迫害者「サウロ」が主に出会う特別な経験とは異なる）をした者であることを言明する。しかしそれは必要最小限度である。彼のそのような特別な経験は決して頻繁ではない。いや、経験はあったかもしれないが、彼はそのような体験を自らの誇り（使徒性の証明）とはしない。ここにおいてもわずか4節の分量でその特別体験を語っている。大変な節度をもって。

その内容とは、「14年前」（12:2）のこと。この表現が、そのような経験が日常的なものでなく、一時的な経験であることを示唆している。2節の「第三の天」と4節の「楽園」とは同意で語られている。当時の世界像において、ユダヤ教には、三つあるいは七つの階層をなす天という観念があった。ここではその「三つ」の観念が用いられているが、その三つ目「第三」のものが「最高」のものである。そしてそれは神と限りなく近い場所、いやまさに神と共にあり、神を見ることが出来る「天界」を意味する。その天界にて、パウロは「人が口にすることを許されない、言い表しえない言葉」（12:4）を耳にする。これは「神の国の奥義にあずかる天界の言語」（ケーゼマン）とも解される。

この神秘的な経験についてパウロは誇る。しかし彼はその経験をした自分を「このような人」（12:5）と第三者的に呼び、地上における私パウロのことは「自分自身」（同）と呼ぶ。そしてその「自分自身」は「弱さ以外には誇るつもりはありません」（同）と。

パウロは決してこの特別な経験を自分の徳を高めるために用いたくない。いや、パウロも人間、その危険性があったであろう。その「思い上がり」（12:7）の危険を察知していたパウロは告白する。「そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました」（12:7）と。

この「とげ」とは何か。多くの人はいをパウロの病気と解する（ガラテヤ4:13-15）。その病気は「癲癇の発作」「急激にはじまる抑うつ状態」（同4:14）とも「眼病」（同4:15）とも言われる。前者の根拠は「さげすんだり、忌み嫌ったり」（同4:14）の言葉。当時、精神的な疾患に対する偏見・差別は甚だしく、悪霊の業とみなされていたからである。

しかしとにかく、パウロにとってこの「とげ」（IIコリント12:7）は我慢ならないものであり、それからの解放を「三度」（完全数のため「徹底的に」の意味）祈ったほどである。しかし結果的に、その「とげ」はずっと彼に刺さったままであり、その苦しみをずっと負い続けるパウロであった。そして他でもなくその経験が、パウロにとってキリストの恵みを、キリストの力を味わい知るものとなる。自分の無力さを知り尽くすとき、キリストの力を知り尽くすのである。ゆえにパウロは言う。「わたしは弱いときにこそ強い」（12:10）と。

さて、今回の学びで第二コリント書の区切りとなる。この書は 13 章も残されているので、その部分から、今回のテーマにつながる部分について触れておく。

「キリストはあなたがたに対しては弱い方でなく、あなたがたの間で強い方です。キリストは、弱さのゆえに十字架につけられました。神の力によって生きておられるのです。わたしたちもキリストに結ばれた者として弱い者ですが、しかし、あなたがたに対しては、神の力によってキリストと共に生きています」(13:3b-4) ——パウロは「弱腰」(2 コリ 10:1) と非難されており、それは前述のとおり、コリントの敵対者たちが自らを強いものとし、力を誇っていたのである。そこでパウロは十字架につけられたキリストを指し示す。侮辱や暴言・暴力に耐え、その死までも一身に引き受けて行かれたキリスト、しかしその十字架のキリストにこそ神の力があらわされた(復活された)のである。

パウロは自らのキャリアのゆえに自らを推薦せず、ただただ「弱い者」(13:4) でしかない自分を通して神が力を発揮してくださる、そのことを訴える。「信仰」(13:5) とはそのことではないか。神の力を信じて、自らの限界性を認め、自身を明け渡す、それが信仰ではないか。

『聖書教育』より

- 「私たちも肉にある者として『弱さ』を抱えています。その弱さの故に感謝の思いはなかなか沸いてきません。しかし、その『弱さ』にこそキリストが働きかけてくださることを感謝して、今一度パウロの言葉をかみしめたいと思います。」(聖書の学び～神を誇る)
- 「パウロによれば、その『とげ』はキリストに近づかせるためであり、キリストに全幅の信頼を置くためであるといえます。そして『とげ』をかかえている者をそのままの状態ですべて祝福してください。だからこそ、キリストが私の救い主であるとの信仰を深めさせていただきたいと思います。」(聖書の学び～自分の弱さを誇る)・・・「『万事が益となるように共に働く』(ローマ8:28) ——これは「信じればすべて上手く行く」という単純なことではないでしょう。この「益となる」というのは、救いに役立つということです。」(6/16宣教より)